
総 説

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 4
P.1-12 (2016)**フロレンス・ナイチンゲールが描いた 21 世紀における在宅看護****Florence Nightingale's vision of Home Nursing in the 21st Century**

小 川 典 子*

OGAWA Noriko

要 旨

ナイチンゲールの思想の中核には「病院は文明の中間段階にすぎない」という認識があり、病院をいつかは克服されるべきものととらえ、病院に代わるものとして、「すべての病人が健康と回復への最善の機会を与えられる」「その人自身の家庭」における看護の実現を看護の最終目標に想定していた。訪問看護の第1の要素は実際に看護することであるが、技術の提供ばかりでなく、療養者の精神生活面にまで影響を与え、生活態度の変革を目指さなくてはならない。そのためには看護実践力、訪問術、教育力が必要である。在宅看護であればこそ得られるものに生きがいにも通じる励ましがあり、それはありふれた通常の何気ない生活のなかにあり、病人は生活の日常性を保持し、主体性を自覚できる。Home Nursing という「家」と「看護」を結びつける新しい言葉を生み出し、在宅看護の概念を作ったのはナイチンゲールが元祖であった。ナイチンゲールのテキストという150年以上前の過去にデータを求めた研究であるが、彼女の在宅看護の思想やその実現のための具体的な施策には今日的なところが多く有用な示唆を含んでいた。現在は過去との関係を通じて明らかになり、さらなる未来の展望が開かれる。

索引用語：フロレンス・ナイチンゲール、在宅看護、訪問看護、地域包括ケア**Key words**：Florence Nightingale, Home Care Nursing, Community Healthcare, Community-based integrated Care**1. はじめに**

2015年の敬老の日に、100歳以上の人口が過去最高の61,500人を超えた。1975年以降45年間連続で日本の100歳以上の人口および高齢者人口(65歳以上人口)は増加し続けている。現在4人に1人の割合である高齢者人口は、2030年には3人に1人となると試算され、この2030年問題は極めて今日的な地域医療をめぐる社会問題となっている。高齢化によ

る疾病構造の変化と医療需要の急増により、20世紀という時代の産物である「病院の世紀」が終焉を迎え、21世紀は「地域包括ケア」の時代が既に始まっている。

ナイチンゲール(1820～1910)は、1867年6月4日付けの従弟ヘンリー・ボナム・カーター宛の書簡に「すべての看護の最終目標は、病人を彼ら自身の家で看護することだというのが私の意見です。でも2000年のことについて話しても何にもなりませんね¹⁾と書いた。この言葉に出会った時、私の看護史への関心、ナイチンゲールへの関心、在宅看護への関心が一つに繋がった。19世紀に生きた彼女が在宅看護を

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

(Nov. 13, 2015 原稿受付) (Jan. 22, 2016 原稿受領)

どのようにとらえていたのか、その看護の方法や実践についてどのように語っていたのかを彼女の原文からキーワードを抽出し、著作を横断した原文テキスト分析を試みた（抽出したキーワードを〔 〕で示す）。私は 1990 年代から現在までの 20 年以上の間、ナイチンゲールの著作である 150 年前の過去にデータを求め、現在と過去との対話を繰り返している。病院や施設がなくなるという気配はないが、「病人を彼ら自身の家で看護する」というナイチンゲールの期待は、いまや少しずつ現実のものとなっている。

ナイチンゲールは、1893 年『病人の看護と健康を守る看護』の冒頭で「新しい芸術 [art] であり、新しい科学 [science] でもあるもの（看護）が、最近 40 年の間に創造されてきた。そしてそれとともに新しい専門職業 [profession] が生まれてきた」²⁾と述べている。ナイチンゲール 73 歳の論文であるが、新鮮で創造性を感じさせる冒頭文であり、看護をプロフェッションと言い切った自信に満ちた斬新な表現である。この論文はサイエンスを多く必要とする「病人の看護」[Sick Nursing] とアートがより必要となる「健康を守る看護」[Health Nursing] について具体的に展開されているが、家族を単位とした人間の生活についておよび地域の健康について等、論文全体が在宅看護に関する文章であると言っても過言ではない。看護は生きた身体と精神を看護しなければならず、看護は工学や数学や「試験によって試すことがたくさんある医学」とは根本的に違っていると彼女はいう³⁾。看護の技が公式化できないのは、画家の技が公式化できないのと同じであり、その理由は「頭と心」を使わなければならないからであり、また看護は「生きた身体と生きた心に働きかけ、心身一体の感情とに働きかけなければならない」という。看護の守備範囲を在宅看護におけるその人の生活や人生にまで拡大すると看護は命 [life] を守る医療的側面であるサイエンスと、生活や人生 [life] を創造するアートの両面を持つとい

う考えにも納得できる。

II. 訪問看護という古くて新しい概念

訪問看護という概念はどのようにして生まれ、発展してきたのであろうか。貧しい人々への訪問活動は、キリスト教と同じくらい古くから存在する。キリスト教のあらゆる歴史を通じて「病人を訪問すること」は重視すべき宗教上の義務と考えられていた。

英国で飢餓の 40 年代と言われる時代に、飢饉で苦しむ貧しい人々の家への奉仕訪問活動をしていたナイチンゲールは、「彼らの結びつきが施すことで支えられている奉仕活動には、よい訪問が不足している」「施すだけでは役に立たない」「私が彼らを看護するのを知っているなら」³⁾と病める人、苦しむ人を癒す仕事すなわち看護を人生の目標に定めたと 1844 年春の日記に記している。彼女は家族が反対するなかで実際に看護の手ほどきを受けるためにドイツのデュッセルドルフ近郊のライン河畔にあるカイゼルスウェルト学園を訪れた。カイゼルスウェルト学園は、1833 年プロテスタントの牧師 Theodor Fliedner によって創設された病人を見舞うことを職務として行う女性の助祭ディーコネスを養成する施設である。聖書時代の初期キリスト教会の奉仕訪問に遡るディーコネスの復活を果たしたカイゼルスウェルト学園の訪問事業は 30 歳のナイチンゲールに少なからぬ影響を与え、看護に関する処女論文 1851 年『カイゼルスウェルト学園によせて』を書いた。「訪問することを学び、人々に教えるよう実力をもつ」ための看護実践力、訪問術、教育力の必要性を痛感し、病人をその家に訪ねる「訪問」を女性の実践的な働きとしたいという積極的な思いを語っている⁴⁾。ディーコネスたちは看護訓練を受け、さらに「掃除や料理や家を整えるすべ」に熟達し、貧しい人々の家でそれら日常生活のすべを行い、教えるのである。「良い訪問」[visit well] についてナイチンゲールは「訪問者も訪問を受けた者も大きな恵みを

受ける」⁴⁾と述べている。訪問する者の実践力の必要性を強調し、女性の能力の発揮する場をディーコネスの訪問活動に見出していた。またここには「病人たちが退院して家に帰った後も続く影響」とあり、学園内の病院における治療や看護と、退院後の訪問看護活動とが連携している様子もわかる。1850年夏に2週間学園に滞在し、翌年彼女は3ヶ月間実際にディーコネスの訪問看護体験をする。彼女が受けた人生初の看護教育が初期キリスト教に倣ったディーコネス養成のための訪問看護であったことが彼女の人生において象徴的な意味を持ち、晩年の彼女を在宅看護へ向かわせる一助になったに違いないと私は考える。

奉仕ではない、宗教によらない職業看護師による組織化された訪問看護の歴史は、やはりナイチンゲール以前には遡ることはできない。訪問看護の父とされるウィリアム・ラスポーンは、病妻を看取るために雇った個人付き添い看護師メアリー・ロビンソンの優れた働きをみて、貧しい人々を救うためには訓練を受けた職業看護師が必要であると考え、ナイチンゲールの助言を得て貧しい病人の家への訪問看護活動を始めた⁵⁾。

クリミア戦争から英国に戻り既に伝説となりつつあったナイチンゲールは、リバプール市を拠点にまずメアリー・ロビンソン1人から訪問看護活動を始めるように、さらに多くの貧しい病人の必要性に応えるために徐々にその活動を拡大して行くように彼に助言していた。この訪問看護活動は「district nursing」と呼ばれ、ウィリアム・ラスポーンが造語として知られている。「district」は、英国独特の呼び名で、教会教区「parish」の一区域を表している。リバプール市を、教会を中心とした18地区「district」に分け、各地区に看護師1人と婦人2人を割り当て、ナイチンゲールの助言どおり、病人の看護のみでなく生活改善や健康教育を実践していったのである。

1867年『救貧院病院における看護』には、この地区訪問看護制度について「家庭にいる貧しい病人の看

護のための組織」と記され、家庭を訪問する訓練を受けた看護師を示す「Nurse」という大文字表現を登場させ、彼らが既に広く公に認められた存在であることを示していた⁶⁾。1871年『産院覚え書』の冒頭には「我々の訓練学校の助産部門は貧しい人々に対し、特に訓練を受けた助産師が求められている田舎の地区「district」において、非常な恩恵を与えるであろうという期待が持たれている」⁷⁾とナイチンゲールの助産師養成学校開校当初の抱負が述べられているが、これは助産も当時は地区看護師の訪問看護によって主に各家庭で行なわれていたことを示している。また1875年の「看護師に宛てた書簡」には「看護の領域は、家にいる貧しい人たちの病床で看護するロンドン地区看護「district nursing」が発足したことによりますます大きくなった」⁸⁾とある。

ナイチンゲールは1890年のウィリアム・ラスポーン著『貧しい人々のための訪問看護のあゆみ』への序文において「訪問看護師とは貧しい人々の家に出かけて病人を看護するだけではなく、家族の人々が健康的に生活できるようにするために実際的な指導をする」と述べ、「衛生設備への公的な援助をどのようにすれば得られるか、いろいろな道具をどのように工夫すればよいかを看護師たちは家族の人たちにその家で教える」「教えているようには見せないで教えていく」という⁹⁾。訪問看護は、その地域をいっそう貧困にし、料金の値上げをもたらす「巨額の寄付金」とは違うし、厄介者にまでは手をさし伸べない「協力」とも違う。雇主も雇われている者をも貧乏にする「ストライキ」とも異なる。立法上の指示による合理的で同情的な援助しか行かない「立法施策」とも違うと、これまでの貧しい人々への実らなかつた救援対策を皮肉り、訓練を受けた訪問看護こそが社会における「新しい飛躍の芽生え」となると述べている。訪問看護師が子どもやその家の働き手を健康にすることでその家は解体せずに済む。訪問看護師は健康的で病気を予防する生き

方を、その家庭に向いて彼女自身がやってみせることによって家族に教えていく。訪問看護師は、施しはしない。しかし「必要なときにはあらゆる種類の援助が受けられる場所と施設を知っている」³⁾ ナイチンゲールの視点は常に適切で具体的で斬新である。

近代的な訪問看護活動はこの実験的試みに端を発し、1861年には公に地区看護 [District Nursing] という新しい概念のための新しい言葉を用いて活動し、その後、ロンドンを含め各地で地区看護組織が発足し、1887年にはヴィクトリア女王の即位 50 周年記念に際して女王から寄せられた 7 万ポンドを得て、「訓練看護師による在宅貧窮患者の訪問看護のための看護専門学校」も造られた。訪問看護活動は飛躍的に前進し、訪問看護師は地区看護師 [District Nurse] または [Queen's Jubilee nurse] と呼ばれた⁵⁾。

現在に繋がる訪問看護活動は既に 150 年前から実施されていたのである。日本では [District Nurse] を「地域看護」と翻訳したために 19 世紀におけるイギリスでの「訪問看護」「在宅看護」の実態がうまく伝えられていないことを私は非常に残念に思う。また注目すべきは“district”が教会教区 [parish] の一区域を表していたことである。現在日本が標榜している地域包括ケアは中学校区を想定しており、家から 30 分以内で通える地域を単位とする在宅医療活動をもくろんでいる。まさに 150 年前のイギリスの在宅看護を手本として 2030 年問題を再考すべきではないだろうか。

III. 労働者階級のための『看護覚え書』

『看護覚え書』“Notes on Nursing”は 1859 年の暮れから 1860 年の英国において出版 2 か月で 15,000 冊が売れ、ベストセラーになったナイチンゲール 40 歳のときの最も代表的著作である。「人生のいろいろな折に」「他者の健康について責任を負う」こととなる一般の女性に向けて、「すべての母親が健康を守る

看護師になることを期待する」と述べ⁹⁾、特に初版本は母親向けに書かれた家庭書といわれている。『看護覚え書』には 3 つの版本があり、第 2 版は、ナイチンゲール自身が大幅な加筆・訂正をし、最後に「看護師とは何か」という補章を付けて看護師向けにかなり専門的な記述も取り入れている¹⁰⁾。第 3 版はタイトルにもあるように労働者階級向けに書かれた大衆書としてナイチンゲール自身によって表現をやさしく、論理をすっきりと単純に書き換えられた『労働者階級のための看護覚え書』“Notes on Nursing for the Labouring Classes”である¹¹⁾。本自体の大きさも手中に納まる縮小版で、値段も第 1 版が 2 シリング (24 ペンス) だったのに対して、6 ペンスの安価で売られた。この版には付録として終わりに「赤ん坊の世話」¹²⁾ という章が付けられ、当時では当たり前であった家庭で子守をする少女たち向けに具体的にわかりやすく赤ん坊のケアについても付け加えられている¹³⁾。3 つの版本から、専門書をより平易にわかりやすくするという、読み手別に内容を書き換え、より多くの人たちに社会の隅々にまで看護を行き渡らせたい、すべての人々に看護を実現させたいと願うナイチンゲールの戦略的なもくろみを感じられる。ナイチンゲールがすべての病人 [all sick] というときには、実際にあらゆる階層のあらゆる種類の病人を考えていたのである。19 世紀のロンドンを描いた風刺週刊誌『パンチ』のリチャード・ドイルらの諷刺画にも見られるように、この時代には貧富の差が「二つの国民」を作り出していた¹⁴⁾。貧しい人々 [poor] は不衛生な貧民窟や救貧院にたむろし、政府の援助品はたちまちのうちに質屋に持って行かれ安酒に変えられてしまうような墮落した生活を送っていた。ただ金銭や看護技術を恵み与えるだけでなく、貧しい人々の生活を整える方法を伝え、精神生活面にまで影響を与えるような援助をしなければならないとナイチンゲールは繰り返し書いている。富める者 [rich] には既に行われていた個人付き添い看護

[private nursing] に代わる、新しい概念の訪問看護 [district nursing] を彼女は [poor] にも実現したのであった。

ナイチンゲールは、一握りの教育ある英国人たち [rich] が貧しい人々の衛生状態を見て見ぬ振りでもごしていき様子を「野蛮人」[Savage] と呼んで鋭く風刺する¹⁵⁾。賢く衛生的に生活し、健康を保持することが一部のエリートの特権であってはならないと鋭く訴えている。酒場をコーヒーパブに代えていく、質屋の代わりに生協ストアを作る。穴蔵のような巣窟を壊して、衛生的な改良住宅を作る。彼女の説いた社会改革は地に足のついたほんとうに具体的な助言ばかりである。彼女は常に貧しい人々への視点を持って貧しい人々を最優先に考えて行動していた。1867年『救貧院病院における看護』には、救貧院にいる虚弱者や老人には看護が必要ないと一般には思われているが、「彼らこそ他の誰よりもいっそう慎重な看護を必要とする」と述べている⁶⁾。看護師の需要と供給のアンバランスを、藁のむしろに落とした1本の針のように、あまりに膨大で手がつけられないような事業であっても、今何ができるか、何が為されていないのかを見極め、施策を立ててシステム化して着手することで実現できると提案している。どこか1つの救貧院病院で訓練を受けた看護師による模範的な看護システムを展開し、そこで看護師の教育も行ない、そこが供給源の役割も果たすというのだ。1人からでも少しずつ続けていくことから始めるというウィリアム・ラスボーンに助言した地区看護制度に通じる看護教育システムをナイチンゲールは、再びここで提言しているのである。1876年『貧しい病人のための看護』には「在宅にいる貧しい病人への看護には費用がかかる」[cost money] と述べている¹⁶⁾。ナイチンゲールが果たしたかったすべての貧しい病人への家庭における看護には、看護の実践そのものにも、地区看護師の養成にもすべてに費用がかかる。彼女はここで看護が富める者

[rich] だけのものになってしまわないために、地区看護は公の費用で賄う必要があるという主張もしている。

IV. 病院は文明の中間段階にすぎない

ナイチンゲールの思想の中核には、「病院は文明の中間段階にすぎない」という考えがあった。冒頭の従弟への手紙と同じ表現が1876年『貧しい病人のための看護』¹⁶⁾と1893年『病人の看護と健康を守る看護』²⁾と年代を超えて2つの論文にある。どちらにも「病院は文明の中間段階にすぎない」[Hospitals are only an intermediate stage of civilization] というまったく同じ表現で、彼女は病院の存在自体をいつかは克服されなければならないと捉えていた。

ナイチンゲールを世界的に有名にしたのは、クリミア戦争(1854～1856)での従軍看護である。当時の陸軍病院は負傷した兵士たちで溢れかえり、過密で不衛生でクリミア熱と呼ばれたチフスなどの院内感染が蔓延していた。兵士たちは戦争での負傷からではなく、感染症等の理由で死んでいくものがほとんどであった。軍医がいても手当する者、看護する者がいない。彼女は看護が治療と同じくらい重要であることを確信したのである。

「私は地獄を見た。私は忘れない」とクリミア戦争の惨状や悲劇の原因は戦場ではなく陸軍病院の内部にこそあったと彼女は主張し、改善策を探る目的で陸軍の衛生状態の調査研究に着手する。帰国するやいなやロンドンの自宅に引きこもり、彼女は執筆活動を開始した。彼女は生涯に150あまりの文献を残しているが、そのほとんどが「クリミア報告書」に連なるイギリス陸軍の衛生や保健に関する文献である。1858年『陸軍の保健に関する勅撰委員会報告』には、換気問題やベッドメイキングやベッドの配置等の具体的な質問と答えがQ&A形式で記されている。その証言の中にも兵士の衛生状態が民間病院や貧しい

家の衛生状態と比べて「過密、換気、排水、清潔の点で劣っていた」と述べ、さらにドーム構造のスクタリの兵舎病棟の構造に対しては、集合施設は便利であるけれど、病気で苦しむ病人を同じ空気を吸う1つの大きな建物に集めることには危険が伴うという¹⁷⁾。料理や洗濯などはできるだけ1か所に集中するのが良いが、「人間は病人であれ健康人であれ、できるだけ別々に分けておかねばならない、集中させるべきではない」と述べている¹⁷⁾。このクリミア報告書には後に書かれる『看護覚え書』や『病院覚え書』さらに晩年の在宅看護についての意見に思想的にも関連するものが多くあり、ナイチンゲールの看護理論の根幹が垣間見える。

ナイチンゲールは、病院構造についても並々ならぬ知識を持ち、病院設計の仕事も多く手懸けている。外観が立派であることが良い病院とされていた時代に、看護師らの働く動線を考え、患者がベッド上でくつろげるようにとベッドの高さ、窓の高さ、天井の高さ、ベッド間の距離、壁材等細部に渡る工夫を施し、ナイチンゲール病棟と名前付けられた現在のICUに似た急性期のための病棟を考案している。19世紀後半に建てられた西欧の病院には何らかの形でナイチンゲールの息がかかっているとされるほどである¹⁸⁾。彼女が病院の長所や短所を十分に吟味した上で、家庭という看護の場に注目している点を忘れてはならない。単に19世紀という時代の制約ゆえに彼女の在宅看護の発想があったわけではなく、彼女は病人のいる場所として病院と家庭の双方を見つめ、その上で自らの理念として家庭という場における看護をとらえていたことを私は強調したい。

主題が病院そのものである『病院覚え書』には自ら病院統計を収集・分析し、各地の病院構造やそこでの死亡率を検討しながら、「内科的・外科的治療処置が絶対に必要である時期が過ぎたならば、いかなる患者も1日たりとも長く病院にとどまるべきではない」「致

命的な病気の多数は病院内で作られる」「必然的に死に直結するような病院というものがそもそも存在すべきであるかどうかを考えてみなければなるまい」¹⁹⁾と述べている。『産院覚え書』にも「十分に快適な家庭において産婦をとり巻いている諸条件に可能な限り似せたもの」「分娩後可能な限り早く褥婦を自宅に帰すべき」「実行可能な唯一の(産褥熱予防)対策は産科病棟を閉鎖してしまうことである」⁷⁾という。これらはイヴァン・イリッチが『脱病院化社会』で論じた「社会的医原病」や「文化的医原病」²⁰⁾を想起させる。ナイチンゲールは病院医療に限界を設ける必要性を語り、脱病院化の考えを明確にしていた。そしてさらに「適切な内科的および外科的援助と効果的な看護を受けるのであれば」という条件付きで、「貧民はその哀れな住居にいた方がより早く回復するだろう」と在宅看護の可能性に言及している。多数の人間を収容する病院よりも個人の家の方が健康的である。脱病院化が必要であり、適切な内科的および外科的援助と効果的な看護があれば、すべての病人(妊産婦や障害者を含む)また今日的には高齢者を含む)に在宅看護を受ける可能性があるというのである。

ナイチンゲールと同時代人であるウィルヒョウ(1821～1902)が、後の西洋近代医学の行方を生物学的機会論へ方向づけたと言われる『細胞病理学』を著したのは1858年である。1859年の『看護覚え書』には『細胞病理学』について「病気が人体に及ぼす最終的な変化を私たちに教える科学[science]である病理学[pathology]における知識の増加は非常に大きい。ところが進行している変化の兆候を観察する術[art]についての知識はほとんど増えていない」⁹⁾と病理学のサイエンスと看護のアートを対比させながら人々の関心が病院ばかりに向き、看護の知識が増えないことを嘆いている。パスツール(1822～1902)やコッホ(1843～1910)、北里柴三郎(1854～1917)らが次々に生理学や衛生学や細菌学上の新発

見を進めた時代、医学的診断治療の方法がより局限的なものへと傾いていった時代に、ナイチンゲールの視点は患者というひとりの人間にいつも向けられていた。『病人の看護と健康を守る看護』には「病気の看護ではなく、病人の看護というところに注目してほしい」「これは看護そのものと医学との違いのひとつ」であると述べている²⁾。細分化した医学の進歩を目の当たりにしながらなお、ナイチンゲールの関心は医学や病院ではなく人間ひとりひとりを見つめ続け、集団のなかの個人に目を向けていたのである。

V. 家であれば自ずと得られる励まし

『看護覚え書』の家庭と病院とを並べたり、比べたりする表現から彼女が在宅看護と病院看護の双方をいつも視野に入れていたことがわかる。病院と在宅での看護の違いについて比較検討がなされ、在宅療養において得られる病人への励ましとして具体的な効用が挙げられている。「家庭にいるペットは病人を元気づけ、療養の励ましになる」として、小鳥や犬などの小さなペットに病人が自分で餌を与えたりすることによって元気づけられ、意欲が湧いてくるという。ペットは「長期の慢性病の病人にとっては、こよなき友となることが多い」他に、赤ん坊との接触、目新しい便り、ちょっとした手先の仕事などが療養の励ましになるとして挙げられている⁹⁾。在宅看護であればこそ得られるものに、生きがいにも通じる励ましがあり、それはありふれた通常の何気ない日常生活のなかにある。家庭によくある事物は、在宅療養者を元気づけ、彼の意欲の源となる。家庭であれば病人がより自由で元気をつくような環境を確保でき、病人は生活の日常性を保持し、主体性を自覚できるのである。

ナイチンゲール自身、クリミア戦争従軍以降、リウマチ熱、心臓病、神経衰弱などと診断され何年も在宅療養をしていた実体験がある。伝記にはしばしば「猫たちの様子を長々と綴った手紙」が登場し、「動物た

ちは人間以上に人の心を見通してその気持ちや考えを理解する」などの文章もみられる²¹⁾。またトム（聖トマス病院）やバーツ（聖バーソロミュー病院）など彼女にゆかりの病院名にちなんだ名前を猫に名付けてもいる。ナイチンゲール74歳の1895年に新聞の子どものコーナーに寄せた『小鳥たち』²²⁾という短文には小鳥への実際的な餌やりの助言が平易に書かれているが、それはまさに晩年の彼女自身の療養生活のなかでの、小鳥によるちょっとした慰めや励ましの体験であろう。在宅療養であれば自然に得られるこのような励ましも病院や施設では多くの場合あきらめざるを得ない。看護者の立場からはなかなか理解しにくいだが、患者の側に立ってこそ分かる励ましである。『看護覚え書』のなかでナイチンゲールは、病人に直接作用し、実際に回復への手段となるものとして、物の形、色、変化、光、音などを挙げている。病人の回りの状況が気持ち[mind]を癒し、さらにその癒された気持ちが身体[body]を癒し、病人を回復へ導いていくと言う⁹⁾。さらに病気の回復を促す周囲の環境を整えることは健康な人から見ると贅沢でわがままな病人の気まぐれ[fancies]とされ本当には理解されないことが多いと嘆きながら、この気まぐれ[fancies]こそが、病気の回復に必要な何かであるので、最も優先されるべきだとナイチンゲールはいう⁹⁾。病院ではわがままであり、贅沢な気まぐれとされることが実は回復への早道であるというのだ。[patient]の動詞形は「我慢する」である。個人のわがまはまさに「我慢すべき」もの、病院では厄介者やわがままな患者と言われるような患者の気まぐれ[fancies]が実は療養者には必要不可欠なものであり、実際に回復への手段となる。病院ではあきらめざるを得ないものでも在宅では自由にできることが多い。

『病人の看護と健康を守る看護』には「看護師が持つべき三重の関心」が述べられているが、これと同じ表現が1873年「看護師と見習生に宛てた書簡」にも

ある²³⁾。この 3 つの関心のうちの第 1 の関心が自分の受持ち患者ひとりひとりに対する個別で「母親的な関心」[motherly interest] である。ナイチンゲールによれば、家庭が安らぎやくつろぎの場である背景には、必ず母親像が存在する。ここで彼女が使っている言葉は [mother] ではなく [motherly] であることに注目したい。必ずしも真の [mother] が家庭に必要なのではなく、[motherly] という母性的なものの存在が家庭に求められているのである。「英国よりはるかに多くの男性が家庭的な仕事をしている大陸では」という表現もあり、男性であっても母性的な存在になりうることも示されている。母親の何気ない気遣いや形のない導きや観察が絶えずなされているからこそ、家庭は安らぎやくつろぎの場となる。家庭が家庭であるためには母性的なものの存在が必要なのである。

1880 年『病院と患者』には、「疾病を治癒させたり予防したりまた死に行く人や不治の人の道を安らかにするための科学や実践をどのように進歩させるか」とターミナルケアへの意欲も述べられている²⁴⁾。また 1894 年『町や村での健康教育』には「問題を独創的に処理する能力が必要」²⁵⁾ と言い、病院には設備があり医師や他の医療技術者が近くに控えており、また病院毎の規則によって多かれ少なかれ特定の基準に制約されながらケアするが、在宅看護ではより自由で独創的な問題処理型のケアが求められることは、現在の訪問看護も同じである。

VI. ヘルスミッショナーのモデル事業

1860 年に設立したナイチンゲール看護学校の卒業生たちによる訓練された看護が急速に広まり、人々の衛生上の知識も向上してきた 1890 年代には、看護をもっと広く直接人々の家庭に持ち込んで、より多くの人々がその恩恵に預かれるようにする構想を彼女は持ち続けていた。1893 年『病人の看護と健康を守る看護』には、ナイチンゲール自身が命名した「健康伝道

者」[health missionary] によるまったく新しい「家庭」[at home] を中心にした健康を守る看護の構想や新しい概念による在宅看護の領域を広げようとする試みが述べられている²⁾。健康伝道者と呼ぶ新しい職種の女性を養成して、村落で田舎家の母親に講義をし、次いでそれぞれの家に入り、話し合い、講義内容を実際にやってみせる—この健康伝道者の構想はナイチンゲールが提案し、助言し、ナイチンゲールの指導の下に当時実際にモデル事業を実施した。「すべての病人を家庭で看護すること」[to nurse all sick at home] というナイチンゲールの描いた看護の最終目標は実現へ向かって着実に前進していた。

ナイチンゲールの姉パシノープの嫁いだヴァーネイ家は、英国バッキンガムシャー州のクレイドンにあり、ナイチンゲールはヴァーネイ家の所有地の管理や村の衛生問題などの手助けをするためにしばしばこの地を訪れている。訓練を積んだ看護の専門家である看護師が村の母親たちに人々の健康や家庭の健康を守る基本的な知識と技術を教える。その教育を受けた村の母親たちが近隣の家々を訪問して、健康管理の方法を地域の隅々にまで伝えていくという「健康伝道者」[health missionary] の構想についてナイチンゲールはクレイドンハウスを訪れるたびにバーネイ卿と話し合い具体的に構想を膨らませていった²⁶⁾。村の母親たちが看護の専門家である看護師から看護を直接学ぶことによって家族の健康を守る知識と力量を身に付け、その力量がいずれその娘たちや孫たちにまで伝えられ、その隣の家の、またその隣の家の家族へと伝えられ、いつかは村全体が健康を守ることができるようになるという構想。各家庭に健康習慣が培われ、貧しい人々の間に健康的な生活が実現されれば、地域社会の病気が減少し、経済効果が期待できるというのである。健康や衛生の知識や技術すなわち看護の知識や技術を「伝道する」というナイチンゲールのこの構想がヴァーネイ卿の援助もあって実現した。

ナイチンゲールの提案を受け入れたバッキンガムシャー州の議長であった姉の義理の息子ヴァーネイ・フレデリックの全面的な協力もあって、ロンドンの北西の町バッキンガムシャー州のエイルズベリー地区でナイチンゲールの指導の下、実際にヘルスマッショナーのモデル事業が試みられた。家族の健康を担っている母親たちが実際に健康教育を受け、その女性たちが近隣の他の家族へ訪問活動することによって健康習慣を広めていくという地域ぐるみの幅の広い構想を実現したのである。

またこの1893年『病人の看護と健康を守る看護』には、地域社会の健康という概念も登場している。「個体の健康は地域社会の健康である。個体の健康なくして地域社会の健康はあり得ない」²⁾と、今日言うクライアントとしてのコミュニティを連想させる。翌1894年の『町や村での健康教育』では、この構想がより具体化される。訓練された看護師が監督となり、医師などの保健医療職員と連携して現地の婦人に健康教育を実践し、その訓練を受けた現地の婦人がそこに住む貧しい人々の家庭を訪問し、母親たちひとりひとりの個別性を重視した「親密な関係」を築き、「友だち」となり、「彼女たちをひとつの階級としてではなく、ひとりひとりの独立した人間として理解」し、「病気の看護とは別物の、病気を予防する」²⁵⁾ための健康習慣を教える活動をしようというのである。健康教育を訓練された看護師だけのものとせず、実際に家族の健康を担っている女性たちが他の家族に訪問活動をして健康教育をするという、視野の広い構想である。

ナイチンゲールは村落をひとつの単位とした地方自治の一環としての健康教育活動の実現をめざした。1894年にバッキンガムシャー州保健会議に寄せられたナイチンゲールのメッセージ『保健衛生と地方行政機関』には「健康は病気よりはるかに重要なもの」であり「病人を養うより健康を増進する方が経済的である」「予防できる病気が現に存在するのは社会的犯罪

である」²⁷⁾と述べ、公衆衛生問題の解決のための地方自治の役割に対する期待が示されていた。WHOとユニセフが「2000年までにすべての人々に健康を」というプライマリー・ヘルスケアのスローガンを掲げたのは1975年である。それよりはるか以前にナイチンゲールは「病気よりも健康を」と述べて、ヘルスナーシング、予防看護という考えを実践したのであった。

『病人の看護と健康を守る看護』には、[health missioner] [health nurse] というナイチンゲールによる造語が登場し、さらに彼らによる、家庭での健康を守る看護を彼女は [health-at-home nursing] と呼んだ。「家庭内の健康は家庭からのみ学び得るし、家庭内においてのみ学び得る」のである²⁾。

ナイチンゲールの最晩年に書かれた1900年の「看護師と見習生に宛てた書簡」には、[home nursing] という現在の私たちが使っている在宅看護そのものの概念を表す造語が登場している。そこには「家庭看護が日常当たり前の事実になることを期待する」「家庭に日常的に看護を入れたい」²⁸⁾と述べられていた。彼女は「家庭」[home] で健康を守る看護を実践することの積極的な意味を言語化し、看護の古くて新しい領域を広げようとしていた。ナイチンゲールが自分自身のなかで在宅看護の概念を発展させていながら、新しい言葉を生み出しているところに注目したい。

概念を表す英語である [concept] から派生した [conception] は、「妊娠」「受胎」の意味を表し、「概念」という言葉には「孕む」という意味が内在している。新しい言葉を作るとは、どれだけその言葉のなかに新しい意味を「孕ませるか」である。ナイチンゲールは地域で働く訪問看護師たちが新しい意味を込めた言葉をもつことによって、彼女の在宅看護の新しい概念が普遍化することを期待したのである。

現在のアメリカ看護師協会 [ANA] の「看護の基準」によると「在宅看護」[home health nursing] は歴史的には“community health nursing”とみなされている

たものが、「地域をベースにした看護実践の独特で重要な 1 つの型と考えられるようになった」²⁹⁾とあるが、既に 1900 年にナイチンゲールが [home nursing] という造語を使っていたのである。[home] という言葉の概念を「看護」に最初に結びつけたのはナイチンゲールが元祖であった。

ルーシー・セーマーは 1947 年 5 月にアトランティックシティで開催された国際看護師協会の大会における講演で、ナイチンゲールの健康伝道者“health missionary”の構想こそが、後の英国のナショナル・ヘルス・サービスに位置づけられた「保健訪問員」“health visitor”の原型であると述べている⁵⁾。

現在の英国や米国の在宅看護、訪問看護、公衆衛生看護には、ナイチンゲールの理念が受け継がれている。ナイチンゲールが創始して命名したモデル事業は、健康伝道者 [health missionary] であり、まさに健康 [Health] を伝道 [mission] するという造語でこの新しい概念の新しい職業のモデル化を実際にナイチンゲールは試みたのである。

ナイチンゲールの“health nursing”理念をもとに米国のリリアン・ウォルド (1867 ~ 1940) は“public”の一語を付け足して“public health nursing”という新しい概念を造り、新しい在宅看護の理念を生み出したと自ら語っている³⁰⁾。リリアン・ウォルドは 1893 年ニューヨークに世界最初の看護師によるセツルメントを開設したその人である。そこで行なわれていたのは現在に続く訪問看護であった。英国のナショナル・ヘルス・サービスの原型にも通じるナイチンゲールの理念は、イギリスからアメリカへ伝えられ、さらに新たな概念を生み、現在の日本の私たちの在宅看護に繋がっているのである。

現在は過去との関係を通じて初めて明らかになることに感慨を覚えざるをえない。

VII. おわりに

ナイチンゲールの予言どおり 2000 年に日本では介護保険制度が始まった。日本ばかりでなく、病院から在宅へという脱病院化・脱施設化は北欧でのノーマライゼーションの考えから始まった世界的な現象である。しかし医療費高騰のあおりから、日本では病院から高齢者が追い出されたような印象である。私は、2000 年から 10 余年間地域での在宅看護に携わり、ナイチンゲールの思想を生かした「より自由で元気になるような環境を確保できる」¹⁹⁾回復期ケアのための家庭的な少人数デイサービスを立ち上げた。多数の人を収容するために作られた施設よりも家に似せて建てられた少人数用の建物の方がより健康的でより経済的であるというナイチンゲールの思想に倣って、より自由な雰囲気大切にされた。回復期施設の備えるべき第一の条件は、「病院とは全然似てない」ことであり、その理由について「家庭で暮らすような気持ちにさせるため」、病院にいる限り彼らは病院の患者であり、入院患者として考え、行動し、決して回復しつつある者としての自覚がないと現代で言うホスピタリズムにも言及し、家に似せることで精神面での効果を彼女は期待していた。さらに「彼らこそ他の誰よりもいっそう慎重な看護を必要とする」⁶⁾という理念から虚弱者や高齢者のために訪問看護師および介護支援専門員として介護保険当初から、地域医療における連携・協働の業務に携わってきた。

これからの日本の地域包括ケアシステムの主要な担い手は訪問看護師であると言われている。訪問看護師は、病人の看護ばかりでなく、病人を在宅で介護している家族とその生活の場に入っていく病院とは別の方法で生活に寄り添い、現実を見据えた切れ目のない医療を続けていかなければならない。じっくりと信頼関係を築き、訪問看護師の活動から療養者の生活をより健康的に静かに改革していく。長い時をその人と共に過ごし、目に見えない関係性を少しずつ目に見える方

法に変えていく持続的な関わりの必要性はナイチンゲールの改革の姿勢に通じる。

ナイチンゲールの在宅看護理念を日本の待ったなしの地域包括ケアの現場にもっと生かして行きたい。今日の日本の在宅看護における学問体系の確立のためにも、今一度ナイチンゲールの在宅看護の理念に倣う必要がある。ナイチンゲールのテキスト研究という過去にデータを求めた研究であるが、在宅看護という現在最も急速に成長し、変化している今日的なテーマであったので、彼女の在宅看護の思想やその実現のための具体的な施策には、今日にも応用可能な数々の示唆が明らかになった。

引用文献

- 1) Nightingale, F. : World Health Aug-Sep-1988-How Right Florence Nightingale Was!, Inter National Nursing Review,35(6), 164. 1989.
- 2) Nightingale, F. : SICK-NURSING AND HEALTH NURSING,1893 : Compiled by Lucy R. Seymer, Selected Writings of “Florence Nightingale” New York : Macmillan Company. 1954.
- 3) Nightingale, F. :Introduction to the ‘History of nursing in the homes of the poor’, William Rathbone : Sketch of the history & progress of district nursing ,from its commencement in the year 1859 to the present date ,including the foundation by the Queen of the ‘Queen Victoria Jubilee institute ’ for nursing the poor in their own homes, 1890.
- 4) Nightingale, F. : KAISERSWERTH ON THE RHINE, London, Ragged Colonial Training School, 1851.
- 5) Seymer , R. Lucy :A General History of Nursing, 1957. 小玉香津子訳 :看護の歴史、医学書院、1978.
- 6) Nightingale, F. : NURSING IN WORKHOUSE INFIRMARIES, 1867:Compiled by Lucy R. Seymer ,“Selected Writings of Florence Nightingale”, New York : Macmillan Company, 1954.
- 7) Nightingale, F. : INTRODUCTORY NOTES ON LYING INSTITUEIONS, Longmans, Green & Co, 1871.
- 8) Nightingale, F. : London May 26, 1875-Florence Nightingale to her nurses,1875: Edited by Rosalind Nash “Florence Nightingale to her nurse” London : Macmillan. & Co, Ltd. 1914.
- 9) Nightingale, F. : NOTES ON NURSING : Lodon, Harrison, 1859.
- 10) Nightingale, F. : NOTES ON NURSING : New edition, revised and enlarged. London : Harrison, 59, Pall Mall, Bookseller to the Queen, 1860.
- 11) Nightingale, F. : Notes on Nursing for the Labouring Classes : London, Harrison, 1861.
- 12) Nightingale, F. : Minding Baby, Notes on Nursing for the Labouring Classes Appendix : London, Harrison, 1861.
- 13) 小玉香津子 : フロレンス・ナイチンゲール ; 『労働者階級のための看護覚え書』 の実際、およびその今日的意味について、総合看護、32 (2)、17-24、1997.
- 14) 松村昌家編 : 『パンチ』 素描集—19世紀のロンドン—、第5版、岩波書店、東京都、16、1994.
- 15) Nightingale, F. : Who is Savage ? Social Note,1 (10), 145-147, 1878. : 小玉香津子訳、この野蛮人は誰か? ナーシング・トゥデイ、1 (1)、22-25、1986.
- 16) Nightingale, F. : ON TRAINED NURSING FOR THE SICK POOR, 1876 : Compiled by Lucy R. Seymer, Selected Writings of “Florence Nightingale” New York : Macmillan Company. 1954.

- 17) Nightingale, F. : SANITARY CONDITARY OF ARMY-REPORT of the COMMISSIONERS ROAD HERBERT, 1858.
- 18) 長澤泰：ナイチンゲール病棟の再発見、総合看護、14 (4)、9-31、1979.
- 19) Nightingale, F. : NOTES ON HOSPITALS 3rd edition, enlarged and for the most part rewritten : Longman, 1863.
- 20) Illich, Ivan :Limits to Medicine-Medical nemesis, 1976 : 金子嗣郎訳、脱病院化社会、昌文社、1979.
- 21) Cook, Sir, Edward : The life of Florence Nightingale, 1914 : 中村妙子・友枝久美子訳、ナイチンゲール [その生涯と思想]、時空出版、1994.
- 22) Nightingale, F. The Newcastle weekly chronicle, supplement, Saturday, February 16, 1895 : 小玉香津子訳、小鳥たち、ナーシング・トゥデイ、1 (6)、30-32、1986.
- 23) Nightingale, F. : May 23, 1873 -Florence Nightingale to her nurses, 1873: Edited by Rosalind Nash "Florence Nightingale to her nurse" London : Macmillan & Co, Ltd. 1914.
- 24) Nightingale, F. : HOSPITAL AND PATIENTS, Signed at end ' F. N.' Proof, 1880.
- 25) Nightingale, F. : HEALTH TEACHING IN TOWNS AND VILLAGES, 1894 : Compiled by Lucy R. Seymer Selected Writings of "Florence Nightingale", New York : Macmillan Company. 1954.
- 26) 小玉香津子：ナイチンゲール一人と思想 155、清水書院、東京都、1999.
- 27) Nightingale, F. : Health and Rocal Government, 1894 : 掛川和嘉子訳、保健衛生と地方行政機関、ナーシング・トゥデイ、1 (2)、24-26、1986.
- 28) Nightingale, F. : May 28, 1900-Florence Nightingale to her nurses, Lithographed copy of F. N.'s., 1900.
- 29) American Nurses Association : STANDARDS of Home Nursing Practice ; Americcan Nurses Publishing,1986.
- 30) Dock, L. Lavinia. : Our first Public Health Nurse "Lillian D. Wald" Nursing Outlook, oct. 19(10), 659-660, 1971.

参考文献

- 1) Nightingale, F. 1851-1900 : 湯慎ます・薄井担子・小玉香津子他編訳、ナイチンゲール著作集 1-3、現代社、1974-1977.
- 2) Nightingale, F. 1872-1900 : 湯慎ます・小玉香津子・薄井担子他編訳 : 新訳・ナイチンゲール書簡集、現代社、1977.
- 3) Nightingale, F. 1853-1894 : 薄井担子・小玉香津子・田村真他編訳 : 看護小論集、現代社、2003.
- 4) 小川典子：フロレンス・ナイチンゲールにおける在宅看護の概念、看護研究、30 (1) , 63-74、1997.
- 5) 小川典子：ナイチンゲール『看護覚え書』の構造を読む—方法としての書誌学的研究、ゆみる出版、東京都、1999.
- 6) 小川典子：ナイチンゲールからつながる現代の在宅看護、看護教育、55 (9) , 869-873、2014.